
深淵の内包者 (闇の断罪者と無の還元者 ~ 世界の秘密と魔法使い ~ の再構成もの)

clown

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深淵の内包者（ 闇の断罪者と無の還元者）世界の秘密と魔法使いの再構成もの

【Nコード】

N1769BA

【作者名】

clown

【あらすじ】

元々、この世界には魔力と呼ぶものがあり、その力は世界を循環していた。しかし、人は魔力の存在に気付かずに過ごしていた。ある時、人に魔力をそして、それを操る術・・・魔法を教えた存在がいた。

その存在は『A^{アルヴィス}』と呼ばれ、魔法を世界に広め始めたが、それを阻む者達が現れた。その者達は『（オメガ）』と名のり、『A』

と『』の戦争が始まった。

戦争は激しく、双方に多大なダメージを与え、共に世界から消える形で幕を閉じた。

その後、『A』と『』が残した知識をもとに、人々は魔法を独自に研究し始めた。しかし、未熟ゆえ、すぐにはいかず、同時に『科学』の研究もなされてきた。

そして、数度の世界規模の戦争が起こり、『魔法』と『科学』を発展させてきた。

最後に起こった戦争から200年後、『魔法』と『科学』が交わった世界で、一人の少年の物語は始まる・・・

闇の断罪者と無の還元者とは登場人物や設定に多少の違いがあります

プロローグ

元々、世界には『魔力』があり、『魔力』は世界を循環している。『魔力』は一つのエネルギーであり、世界を構成する要素でもある。『魔力』は一部の例外を除けば、大きさは様々であるが、世界の全てのものが持つている。

しかし、人はそのエネルギーに気付かずに日常を過ごしていた。

そこに、ある存在が現れた。そのものは突然現れ、『魔力』の存在とそれを運用する方法、『魔法』を世界へと伝え始めた。

その力はとても便利で、火をとますのに木屑や油、摩擦熱等を必要としない。水を得るにも、川から水路を引かなくて良い。風を得るにも態々自然に吹くのを待たなくて良い。畑を耕すのも鋤を持ち、多くの労力を必要としなかった。

『魔法』はとても便利な力であり、少しずつだが、確実に広まっ
ていき、その存在を伝えたものは『魔法』を伝えた最初の存在とし
て、『A』と呼ばれた。その古代魔法文明の時代を『Aの時代』と
呼んだ。

しかし、人がそれを完全に習得するまでには至らなかった。それを
邪魔した者達がいたからだ。

『A』を終わらせるものとして、そのものは『オメガ』と呼ばれた。
『アルヴィス』達もまた、『魔法』を使い、『A』とその弟子達、そして『
』を名乗る者達との間で戦争が始まった。その戦いは激しく、双

方に多大なダメージを与え、共に世界から姿を消す事となった。

しかし、そのもの達が残した『魔法』の知識は世界に残った。人々はその残された知識を用い、『魔法』を発展させていった。しかし、人の『魔法』は発展途上のため、同じくして『科学』も発展していった。が、同時に問題が次々と起こって行つた。『魔法』による犯罪、知識の独占、『科学兵器』の開発・乱用等だ。

そして、再び『魔法使い』による戦争が起こり始めた。この時代の戦争は、『Aの時代』の戦争と異なり、『科学兵器』も用いられ、過去の戦争より、世界に残した傷痕は悲惨なものとなった。

しかし、ただでは転ばないのが人というもの。戦争を通じ、『魔法』と『科学』がさらに発展した。そして、その終戦と同時に、『科学』の一般社会への応用や『魔法』と『魔法使い』の知識や『術式』の公開等を行う様になった。これまでは、『科学』は兵器開発が主であり、『魔法』についても、知識や技術を国や特定の組織が独占していたからだ。それに伴い、法律も改定や新たに制定されていた。

『科学』についてはその全てを国が法を定め、管理をした。『科学』は誰でも扱う事ができるが、威力そのものにはこれといった差はなかったので、基準も明確であり、国で管理できた。

しかし、『魔法』は、発展した結果、場合によっては『魔法使い』一人で一国家を相手取る事が可能なものが現れたり、『魔法使い』同士で組織を設立し世界に混乱を起こすものも現れた。国でその全てを管理するには人材が少なすぎたのである。

そのため、近代の戦争で、戦争終結に協力的だった六つの『魔法

使い』の組織、それを構成する財閥や古くからの家系等に協力を仰ぐ事になった。その組織とは、日本の『魔法協会』、北欧の『聖王騎士団』、中国の『五行の守護者』、アフリカの『九つの柱』、ロシアの『世界樹の根』、アメリカの『神の使途』の六つの組織だ。これらの組織は『六魔天』と呼ばれている。

各国々で『六魔天』との関係性は異なるが、基本的には国の魔法組織、日本では『魔法庁』が『六魔天』へその管理を委託する形となっている。

多くの戦争から、人々は学び成長し繰り返し、『魔法』と『科学』を発展させてきた。そして、世界規模の戦争から約二〇〇年後・・・人々が魔法を生活の一部として当たり前前に捉え、科学と魔法が融合した世界・・・それが、私達の世界だ。

しかし、この世界には幾つもの不思議が溢れている。その最たるものは『A』と『』だろう。このものはどこから来たのか・・・そして、何処へ消えたのか・・・かつての戦争で滅んだのか・・・それとも・・・

世界にはまだ、私達の知らない事が満ちている・・・

そこは、夕方の公園、幼い少女が砂場で屈み、泣いていた。

「なあ？何で泣いているんだ？」

その場を通りかかった同い年位の少年は気になり声をかける。少年は、家に帰っても誰もいないため、何時も日が暮れるまで外で時間を潰していたが、その少女を見るのは初めてだったので気になっ

ただ。

「グスツ……ふえ……？」

少年が何度か声をかけると、少女はようやく自分に声をかけられている事に気付いたのか、反応を見せる。しかし、未だ俯いているため、その顔までは見えない。

「よ！どうしたんだ？なんで泣いているんだ？」

「……グスツ……一人……だから……」

「え？」

「誰も、私を見てくれないから……」

少女の答えを、少年は勝手に解釈した。誰も自分を見てくれない、一人ぼっち……つまり、親に構って貰えず、友達もいない……と。

「……そつか……じゃあ、俺と一緒にだな。」

「……一緒に？」

少年の母親は既に他界し、父親は全く家に帰ってこない。お金は届くがそれだけだ。学校へ行っても友達はいない。理由は……分かっていない。クラスメイトのリーダー格の人物と、その取り巻きとケンをし、そいつらを半殺しにしたからだ。

しかし、少年はやり過ぎたとは思っているが、悪いとは思っていない。

「・・・夢？・・・はあ、はあ・・・最低な夢だった・・・クソ！俺の思い出を・・・」

少年・・・歳は一五歳位だろうか・・・短めの黒髪に、黒い瞳、整ってはいるが、現在は、夢見の悪さからか、もの凄く不機嫌な表情だ。

「おっさんめ・・・良くも俺の大切な思い出を・・・っと・・・今何時だ？」

自分の発した言葉で、『おっさん』に呼ばれていた事を思い出した少年は枕元に置いてある時計を確認する。すると、顔色が変わる。

「やべ！時間が！おっさんとの約束が！」

少年は急ぎ身支度を整え部屋を出て行く。遅れると説教が長くなる。

そこは、世界のどこかにある城。その廊下を少年が急ぎ歩いている。黒いスーツに身を包んでるが、急いで着替えたためか着崩している。

少年は一つの扉の前で立ち止まった。そして、時計を確認し、間に会った事に安堵し、呼吸を整えノックする。

そして、ノックをすると返事を待たず入っていった。

「慧^{けい}、ノックをしたら返事を待つのが本当だろ？直ぐに入ってくる

奴があるか・・・」

中には一人の男がいた。少年・・・慧と同じ黒い髪に黒い瞳、同じスーツに身を包んだ男性だ。年は40代前半といったところか・

慧の行動を呆れた声で嗜める。しかし、男性の顔を見た慧は、今朝がた見た夢を思い出し、怒りをぶつける。

「五月蠅い！俺の思い出を穢しやがって！反省するのはおっさんの方だ！間に合ったからいいだろ！」

逆ギレして怒鳴る慧だが、『おっさん』は何故ここまで怒っているのか分からない。怒られる理由も思い当たらないため、慧を嗜める。

「訳の分からない事で怒鳴るな。全く・・・とりあえず、ノックしたら返事を待て？いいな？」

「む・・・うん。ごめんなさい。俺が悪かったです。」

『おっさん』に冷静に窘められ、慧も冷静になり、謝る。慧が素直に謝ったので『おっさん』は「分かれば良い」と手で、合図する。

「それで、おっさん。話って？」

気を取り直し、今朝見た夢は忘却の彼方へと吹き飛ばし、書類仕事をしている『おっさん』・・・晟せいに慧は問う。そもそも、晟から話があると呼び出したのだ。

「ああ、慧。お前、今度『一天城ヶ丘学園』へあまぎがおかがくえんの高等部に入学するんだろ？」

「ああ、それが？」

「そこ、未来が運営している学園だぞ？」

「・・・はあ！？え？未来って、未来さん？『魔法協会』の『七大法典』の一人の『真の未来』？」

「ああ、そつだ。」

慧が驚くのも無理はない。『魔法協会』とは慧が所属している組織『断罪の牙』と敵対している組織の一つだからだ。そこに通うと言う事は敵陣に乗り込むと言う事と同義だ。

なお、『七大法典』とは『魔法協会』のトップの七人の事を指す。その内の一人が『真の未来』と言う訳だ。

「はあ、お前な・・・自分が試験を受けた学園の事位、ちゃんと調べておいたらどうだ？」

「んなこと言っただつて、友達がこゝ一緒に受けなかつて誘つてきたから受けただけだし・・・もしかして、結構有名なのか？」

数少ない友人と一緒に受けないかと言われ二つ返事で返したため、どのような学校か調べなかつたのが裏目にでたのであった。

「そりゃな。『真の未来』が理事長を務める学園・・・というか『六魔天』の内『魔法協会』が運営する学園ってことで、結構有名だ

ぞ？日本にある魔法学校の内、七つしかない『魔法協会』運営の学校だからな。倍率だって高いはずだが？」

慧はその話を聞き、驚く。何に驚いたのかと言うと、慧は魔法学以外は平均位のため、良く受かれたなと思っっているのだ。

「そうだったのか・・・で、どうすりゃ良いんだ？」

このまま入学すれば、組織間の抗争・・・いや、戦争になる恐れもある。敵対している組織の人間が断りもなく敵陣地に侵入するのだ。当たり前だろう。

「ああ、未来には俺から連絡を入れておいた。入学してから、一度未来に挨拶に行け。それで大丈夫だ。」

しかし、断りを入れれば話は別だ。といっても他の者・・・『世界樹の根』や『五行の守護者』等他の『六魔天』や『魔法協会』内でも、『断罪の神威』など他の『七大法典』が理事を務める学園であつたら、こうはいかない。『真の未来』だからこそ、話を通じるのだ。

何故なら、『魔法協会』・・・というより『六魔天』と『断罪の牙』は敵対していわけだが、組織と、個人では話は別なのだ。

特に、『真の未来』は話を通じる上に、慧達の様な者相手でも、ちゃんと対等に扱おうとしてくれるので、個人としては慧も晟も嫌いではない。むしろ、好ましく思っている。それは未来も同じ様に思っっているだろう。だからこそ、慧なら問題ないと判断し、許可を出したのだろう。

「まあ、変りに何か仕事を頼まれるかも知れないが、出来る限り聞

「いてやってくれ。」

「・・・面倒だが、許可を貰った以上は仕方ないな。了解。話は以上か？」

「ああ、それと、ほら！」

そっつい、晟は慧に何かを投げる。

「これは？」

それは、小さな箱で丁寧に包装されている。

「入学祝いだよ。入学おめでとつ。慧。」

「あ、ありがとう。おっさん。」

慧は感謝し、視線で開けても良いか確認し、晟が頷いたので、包装を開ける。

「おっさん！これって・・・」

「ああ、以前のものは壊れただろう？お前の場合、表と裏、二つの生活があるからな。それが無いと不便だからな。知り合いの細工師に加工してもらったものだ。これまでのものより、良い出来だぞ。」

箱の中身には黒い宝石をはめ込んだブレスレットが入っていた。

一目見ただけでは気付かないかも知れないが、結構な魔具である。

魔具とは術式を刻んだものや魔力が封じて有るもの、固有の特殊

な効果を持ったものなど様々だが、ようは『魔法』を補助するための道具だ。

「有難うな。大事に使わせてもらうよ。じゃあな!」

「ああ、無茶し過ぎて壊すなよ?」

慧は晟からもらったブレスレットを抱え、部屋からでていった。後に残ったのは晟一人・・・

「ふふふ、苦勞しますね、晟。」

ではなかった。どこからか、男性の声が聞こえてきたのだ。

「盗み聞きとは感心しないな・・・炎耶^{えんや}」

「すみません。そのようなつもりはなかったのですが・・・」

その言葉と同時に、白い炎が浮かび上がると、その炎が人の形を模ってゆく。するとそこには、白い髪に赤い瞳、着ているスーツは晟や慧と同じもの・・・白河^{しろかわ} 炎耶^{えんや}が現れた。

「はぁ・・・まあいい。それと、俺は別に苦勞とは思ってないぞ?むしろ大変なのは慧だ。自ら望んでとはいえ、表と裏を行き来しているんだからな。」

「そのために渡した『魔具』ですからね。一年前に壊れて以来、使用魔法に制限がかかっていましたから。まあ、その効果は裏にいる際には関係ないものですけどね。」

その白河の言葉から、慧には本来必要がないもの様だ。しかし、表の生活を続ける以上は必要なものであるらしい。まだ、他にも何かある様ではあるが・・・

「そうだな・・・だが、あれから・・・慧が本気になる事は一度もなくなつたけどな。だからこそ、1年も待たせても問題なかつたわけだが・・・学園生活で、なにかしら心境に変化があつて欲しいものだが・・・」

「仕方ありません。あんな事があつたんですから・・・私達は見守ることにしましょう。」

「ああ・・・で？俺に用事があつたんだろ？どうしたんだ？」

慧の事で少ししんみりした空気を変える様に、晟は白河に話を振る。元々何かの用事でここにきて、その際に話を聞いていたのだから事は察することができた。

「ええ、未確認ではあるのですが、『鋼王』を目撃したという情報が入りまして・・・」

白河の言葉に、晟は目を丸くする。

「・・・そうか・・・数年間音沙汰がないと思えば・・・炎耶、引き続き調査してくれ。」

「わかりました。では・・・」

「・・・フリード・・・今になって何故出てきた・・・」

その眩きは闇に呑まれ消えていった・・・

第一話 入学式

今日は4月7日 入学式

慧は校門に立ち、これから通う学園を眺めている。入学試験の会場は別で、合否も郵送だったため、初めて見るのだが、その大きさに「これ、本当に学校か？」と思っている。

その様な反応を見せるのは何も慧だけではない。他にも慧と同じくこれから通う『天城ヶ丘学園』の校舎を啞然と眺める新入生が見受けられる。

『天城ヶ丘学園』は小・中・高一貫の学園であり、基本的にエスカレーター式に学年は上がって行く。しかし、高校に上がる際に、外部から新たに入学希望者を募るのだ。一クラス40人で、AとIとSの10クラスに別れる。計400人が一つの学年の人数だが、中等部までが200人。外部生として、200人が高等部から入学する事になる。つまり、高等部だけでも、1200人となる。

それだけ、人が集まるのだ。これだけ大きくなるのは必然だが、広いのは校舎だけではない。校庭も広く、さらに所々、建物が見受けられる。

なお、現在慧達が見ているのが高等部で、中等部と小等部の校舎は、少し離れたところにそれぞれ建っている。なお、校門は一つだ。よって、全ての学年の生徒がこの校門を通過することになる。

「はあ・・・金掛かってんなあ。（校舎全体に結界張ってあるし、敷地外周には許可なく入れない様に結界張ってあるし・・・この生徒手帳が、鍵か。）」

慧は一人、ポツリと学園を視た感想を呟く。学園には魔法により、壊れない様にするためか、障壁が張ってあり、外周にも侵入者を阻むための結界が張ってある。事前に渡された許可証・・・学生なら生徒手帳・・・を持っていないと入れないようになっていた様子だ。入学案内に『生徒手帳の携帯は必須。無いと学園に入れません。』とあったが、それは比喻ではなかったらしい。

「・・・お？」

そんな感想を抱きながら、改めて周囲を見渡すと、見知った顔が見えたため、そちらに向かう。

「よう！^{かな}緩奈！大口開けてどうした？」

「え？あ！慧！って／＼／＼これを見れば仕方がないでしょ！」

顔を赤くしながらそう言う緩奈に「まあな」と苦笑しながら返す。

この少女は^{せんかい}仙海 ^{かな}緩奈、慧の中学時代からの友人で3人しかいない友人の内の一人だ。150?位の身長に、桜色の髪をツインテールにしており、容姿はとても可愛く、基本的に誰にでも分け隔てなく接するため、男女共にもてる少女だ。

「慧も今来たところ？」

「ああ、^{まきぎ}真樹は・・・周囲には見当たらないな・・・仕方が無い、行くか？」

「うん！」

二人は、中学からの友人を置いて入学式の会場である第一講堂へ案内を頼りに向かう事にした。

因みに真樹とは葛城 真樹の事で、長めの黒髪に黒い瞳、顔は整っている。が、性格に難があり、喋らなければもてるだろうと、周囲に評価される人物である。

なお、慧の評価は、「真面目にしていればなあ……はあ……」という、残念な評価であった。

「沙希は残念だったよね、一緒の学校に通えなくて。」

「まあ、仕方がないさ、沙希の家の事情だからな。何も言わなかったって事は沙希も納得の上ってことだろ。」

「そ〜かな〜……」

慧の言葉に緩奈は納得していないのか、唸る。それだけ、慧、緩奈、真樹、沙希の4人は仲が良かったのだ。

沙希というのは東 沙希と言い、慧の中学での三人しかいない友人の一人だ。この少女だけ、家庭の事情で県外の学校へ進学する事になったのだ。

「沙希の事は俺達がどうこう言っても仕方がないだろ、さっさと行こうぜ?」

「うん……そうだね。後で、連絡入れてあげなよ?喜ぶから。」

「そうか？まあ、連絡はするつもりだったが、喜ぶかあ？」

「うん。間違いなく。」

「・・・緩奈がそういうなら、そうなんだろうな。」

慧と緩奈は、話しをしながら、入学式の会場である講堂に向かう。しかし・・・

「・・・ねえ、慧・・・」

「何だ？緩奈？」

「すぐ目の前に講堂があるのに、何でたどり着けないんだろうね？」

「さあ？」

二人はどういう訳か迷っていた。理由は、目的地である講堂が、校舎内に入ると直ぐ目の前の窓から見えたため、真直ぐ言った方が早いと緩奈が言いだし、慧も特に異論は無かったので、案内を無視し、中庭を突っ切る形で講堂へと向かったのだが、何故かたどり着けない。

「あ！ねえ、あの人に聞いてみようよ！」

「ん？ああ、そうだな。」

いい加減一度戻って案内に従うか考えていると中庭で眠っている少女を発見した。制服は慧達と異なり、黒いブレザーに赤い糸で『魔方阵』が刺繍されている。一見して、この学園の生徒か不明だが、

学内にいる以上関係者と思ひ声をかける事にした。

なお、一般の生徒は女子は黒いセーラー服。男子は学ランである。

「あの、すみません。」

「……ふぁ……何……?」

緩奈が何度か揺ると、やっと起きた。その少女は、長い黒髪に黒い瞳、とても整った顔立ちで、十人中十人が綺麗と言う程だ。慧も思わず息を飲むが、気付かれない様に取り繕う。

「あなた達は……新入生ね……ふぁ……ん。こんな所でどうしたの?」

その少女はまだ眠いのか、可愛らしいあくびをしながら聞いて来る。

「あの、私達、迷ってしまった様で、講堂にはどうやって行けばいいんですか?」

「ん?講堂?ああ……入学式ね……。案内に従って進めば問題ないはずなのだけど……。そうね、私も用事があるから一緒に行くわ。着いて来て。」

少女は率先して歩き出すと、思い出したように、振り向きながら名のり始めた。

「そうそう、私は神凧^{かななぎ} 美夜^{みや}、2年よ。よろしくね。」

「はい！ありがとうございます！私は、仙海 緩奈です。こっちは黒澤 慧です。」

「よろしくお願ひします。（神凧・・・ね・・・）」

自己紹介を済ませると、率先して歩きだした女生徒に続きながら慧と緩奈も講堂に歩いて行く。慧は『神凧』に内心気になったが、聞くのは止めておいた。自ら藪をつつく必要はない。

「ところで、なんで中庭にいたの？普通に案内通りに進めば通らないわよね？」

「え〜と・・・すぐ目の前に講堂が見えたもので、なら直線で言った方が早いかなあと思ひまして・・・」

美夜の問いに、恥ずかしそうに答える緩奈。それに美夜は笑いながら返す。

「ふふ、まあ、そう思つのも無理ないわね。確かに普段ならそれでも大丈夫なのだけど、今日は入学式でしょ？新入生が勝手に関係の無い教室に入らない様に決められた道以外に進むと戻る様になっているのよ。」

どうやら、最初から道は一つしか用意されていなかった様だ。

「そうだったんですか。（まあ、気付いていたけどな。なんか見られていた様だったから迷つたふりはしていたが・・・この視線はあの人だよな？）」

緩奈が聞いたなら怒りそうな事を考えている慧であった。

「と、ところで、神風先輩の制服、私達と全然違いますけど、なんでですか？」

緩奈はこれ以上、さっきの事に触れられたくないため、話題を変え。顔が多少赤いのは、案内を無視して進んだあげく、迷った事が恥ずかしかったのだろう。

「ん？これ？それはね、私が生徒会長だからよ？」

「せ、生徒会長！？」

「……居眠りしていたのに？」

美夜が生徒会長と言う事実には、緩奈は驚愕し、慧は呆れた。

「あはは……痛いところ突いて来るわね……でも、いいのよ。他の役員の子が優秀だから。私の仕事は、今日は挨拶位なんだもの。」

「そうですか……まあ、そのおかげで案内して貰っている訳だから、こちらとしてはたすかりますけどね。」

「そう？ならよかった。で、話しの続きだけど、生徒会役員は皆、私と同じ制服を着ているわ。後、『風紀委員』と『魔法部』もそれぞれ違う制服の着用を義務づけられているわ。まあ、理由は後々説明があるだろうから、その時にでも確認してね？」

「はぁ……わかりました。」

どうやら、違う制服を着ていることは、役職を分かりやすくする

ため以外にも何かしらの意味がある様だが、長くなるのか、後で確認してくれと言うので、とりあえず、納得しておく事にした緩奈であった。

「ところで、黒澤君だっけ？」

「・・・はい？」

そんな緩奈のあまり納得のいつていない表情を見ながら苦笑していると、美夜に声をかけられ、前を見る。すると、目の前に美夜の顔があり、驚くが、なんとか内心に留め、平然と返す。顔が赤くなっていたので隠し切れていなかったりするが・・・

「ちょ！先輩！近いです！」

と、そこで緩奈が間に割って入り、美夜に警戒の視線を送る。

「あら？ふふ・・・黒澤君はモテモテなのね。」

「~~~~~// // //」

その言葉に顔を真っ赤にして抗議の声を上げようとする緩奈だが、それは慧に抑えられる。

「それで、俺に何か用ですか？」

「ん？ええ、ちょっと気になってね。黒澤君は武道か何かやっているの？」

「え？どうしてですか？」

「先ほどから、あなたの立ち振る舞いに無駄がなかったから・・・それに、隙も見事に無かったからね？だから、何かやっているのかなあ・・・とね？」

「・・・そういう事ですか・・・特にこれと言って武道はやっていませんが、知り合いのおっさんに鍛えられているから、そのせいだと思いますよ？」

慧は決まった何かをやっている訳ではない。得意なのが剣術なため、それを主な武器にはしているが、晟や白河の鍛え方は実戦的なものなので、他の武器も一通り使う事ができる。

しかし、驚くのは少し見ただけで、慧が武道に近いものを行っている事に気付いた美夜だ。

（この生徒会長の前では下手な行動は出来るだけ避けないとな・・・）

「そつなの・・・っと、ここね。」

美夜が立ち止まると、そこは一際大きな建物で、学園の奥、敷地の中で言えば中央にそびえ立っていた。そのまま中に入ると、新入生のほとんどが既に椅子に座っていた。

「それじゃあ、ここでお別れね。じゃあね。」

「有難うございました。」

「挨拶頑張ってください。」

慧と緩奈はそれぞれお礼を言い、美夜を見送る。

「・・・面白い人だったね。」

「・・・そうだな。」

少しの間で、自分の力量の片鱗とはいえ、感づかれた事にどう対処しようか悩む慧。

「慧？どうしたの？行くところ？」

「・・・ああ、そうだな。」

しかし、逆に下手に動いた方が不味いだろうと結論付け、緩奈と共に、開いている椅子を探す事にした。

「どうでしたか？彼は？」

美夜が生徒会役員が控える場所に行くと、突然、声を掛けられた。

「どう意味ですか・・・？理事長？」

「そのままの意味です。彼・・・黒澤 慧さんはどうでしたか？」

声をかけてきたのはこの学園の理事長、未来であった。そして、その口ぶりから、美夜はおおよその事を理解した。

「・・・何時から私達を見ていたんですか？」

「ふふ、そう怖い顔をしないでください。あなた方が話しているのを偶然見かけたのですよ。彼の反応が気になったので、見ていただけです。それでどうでした？」

何故、彼・・・慧の反応を気にするのか・・・未来の言葉に納得いかないところもあるが、とりあえず、質問に答える。

「そうですね・・・魔力は感じた所だとそれほどではないですが、立ち振る舞いや、隙の無さから、結構な実力の持ち主だと思います。」

その言葉に、未来はクスクスと笑う。

「ふふ、そうですね・・・なら良かったです。」

「・・・ですが・・・気のせいか、どこか迷っているというか・・・悲しそうな目をしていたのが、気になります。」

「・・・そうですね・・・ありがとうございます。大体の事は解りました。」

（まだ、ふっ切れていないようですね・・・仕方がないですが・・・）

未来はそう言い残し去ろうとするが、美夜に呼び止められる。

「待ってください。どうして、彼をそこまで気にかけるのですか？」

『七大法典』の一人であるこの女性がそこまで気にかける理由・
それが気になり問う。その問いに未来は・・・

「・・・大事な友人からの預かりものですからね。気にかけるのは
当然です。では、私はこれで・・・」

穏やかな顔で答えると、今度こそ未来は去っていった。といって
も職員席に行っただけだが。

「・・・黒澤 慧ね・・・ふふ、楽しみができたわ。」

「美夜！何処に行っていたのですか？」

一人笑う美夜に同じ制服を着た女生徒が声をかけてきた。

「ごめんなさい。夢^{ゆめ}。ちょっと所要でね。」

「もう・・・どうせ、サボッていたのでしょう？ほら、身だしなみ
整えて・・・ってどうしたのですか？何か楽しい事でもあったの？」

美夜に顔は何か面白いものを見つけた子供の様に良い笑顔をして
いた。

「ううん・・・何でもない。それより、そろそろ始まるわね。」

「ええ、ちゃんとしてくださいね。美夜。」

「分かっているわよ。」

こうして、入学式が始まった。

「それでは続きまして、理事長からの挨拶です。」

司会の先生の言葉を受け理事長である未来が壇上に登る。その際、周囲から、歓声のようなものがあがる。

「おお！あの人が・・・」「『真の未来』・・・」「始めて生で見たよ・・・」

など、父兄からも声があがる。そんな中、平然と壇上から挨拶を始める。

『新入生の皆さん。入学おめでとうございます。私は当学園の理事長を務めさせていただいております外神とがみ 未来みらいと申します。』

「うへ〜綺麗な人だね。慧。あの人があなの？」

「うむ。『外神 未来』。『魔法協会』のトップである『七大法典』の一人『真の未来』だな。」

緩奈は慧に質問したのだが、慧が答える前にそれを遮る様に声を発した人物がいた。その聞きなれた声に振り返ると、慧の友人、3人の内の一人、葛城かつらぎ 真樹まゆきがいた。

「なんだ、いたのか？真樹。」

「ふむ。気付いていながら、声をかけてくれなかったのな。」

「慧、気付いていたらなら言つてよ！驚いたじゃない！」

いきなりの真樹の登場に、緩奈は驚き、小声で慧に抗議する。

「はは、悪かったよ。それより、理事長の話聞いた方が良いんじゃないか？」

「う・・・それもそうね・・・」

「ふむ・・・ここは大人しくしておこう。生徒会や風紀委員が睨んでいるからな。」

慧達がこそそ話していたのに感づいたのだろう。脇に控える美夜と同じ制服を着た生徒と、それとは別に白い生地に着いた青い刺繍が入った制服を着ている生徒の一部がこちらを睨んでいた。

「そうだな・・・ところで真樹、あの白い制服を着ているのが風紀委員か？生徒会といい、風紀委員といい、後、魔法部だっけ？なんで制服が違うんだ？」

慧は、先ほど美夜が話さなかった事を真樹に聞く事にした。この友人なら、既に情報収集はしていそうだったからだ。

「ふむ・・・この学園では生徒会、風紀委員、魔法部の三つの組織がこの学園の治安を守っている。そのため、区別をつける必要があり、この3つの組織に属するものは本来とは異なった制服を着る事になっているのだ。それが、あれだな。」

「ああ、そう言うことが・・・」

魔法が世界に広まり、何度かの戦争や幾重にも繰り返されてきた争いから、魔法に対する法も整備されてきた。

その一つとして、魔法にランクをつけ、制限を設ける事にした。このランクは？？まで分けられており、日常生活等で使用を許可されているのはランク？までだ。それ以上の魔法を使用するには『魔法使い』の資格が必要になる。

といっても、普段の生活で特にこのランクを気にするものはいない。何故なら、例えばランク？さえ使えなくとも日常生活に支障はないからだ。それは、『科学技術』の発達や『魔具』により、十分補助が効くからである。つまり、このランクを気にするものは『魔法使い』を指すものが基本だ。

さらに、どの学校でも日常生活に必要な魔法の知識や技術は教えており、普通の学校は公共の場と同じ制限である。が、これでは『魔法使い』の資格取得を目指すものには難しい話となる。そのため、いくつかの例外が認められている。

その一つが、ここ、天城ヶ丘学園だ。ここは魔法をより詳しく学ぶ場であるため、制限があると勉強に支障をきたす。よって、制限は緩くなっている。

なお、魔法を学ぶ場所は他にもある。しかし、どこも『六魔天』の管理下にあるため、何か不足の事態が起こっても直ぐに対処できるからというのがその理由である。

もちろん、魔法書も出回っているため独学でどうにかする事もできるし、『魔法使い』の資格所持者が許可を出せば、ある程度は学べるため、制限を無視する者達もいる。

そういったもの達に対応するのが、六魔天や警察、そして、依頼

を受けたフリーの『魔法使い』となる。しかし、事前にそれを感じたりすることは未だ出来ていないため、対処は後手になっているのが現状である。

話しが変わってしまったが、要するに、その制限は校内に限って存在しないも同然なのだ。そのため、違法行為や魔法の争いを取り締まる自治組織が必要であり、そのものは一定以上の権限を持つ。それが、『生徒会』『風紀委員』『魔法部』なのだ。

その権限を持つものの象徴として、分かりやすい様に制服が異なっている。なお、3つに別れているのはそれぞれを監視し、互いに過剰な取り締まりをしない様にするためだ。

『・・・入学した皆さんの目標はほとんどが『魔法使い』の資格取得や『六魔天』の何処かへの所属だと思います。』

さらに、未来の話は続く。

この学園は『魔法』を専門に教える学校である。もちろん一般教養も教えているが、メインは『魔法』である。ならば、入学したもののほとんどが『魔法使い』の資格を取得する事、そして、『六魔天』に所属する事が目標だろう。一部例外はいるが・・・

『魔法使い』の資格とは、これも、法の一つで、これがないと、ランク？以上の魔法は公に使用できない。この資格は誰もが魔法を好き勝手使つと、治安が悪く、大惨事を招く事になるため、設けられたものだ。

『魔法使い』の資格にもランクがあり、F～SSSの9段階に分かれている。ランクDを基準とし、Dでランク？～？の魔法が使用できる。そして、一段階あがるごとにランクCで？、ランクBで？、Aで？、Sで？、SSで？となり、SSSで？。規律を破ったりす

るとペナルティとして、E、Fと下げられ、Eで？、Fになると魔法の使用自体出来なくなる。

なお、資格を持つ者には『カード』が渡され、それが『魔法使い』証となる。更に、許可されている以上の魔法をすると、『カード』が『六魔天』や警察に知らせる仕組みになっている。それが、『魔法使い』の枷となり、自由に魔法を使うのを防いでいる。したがって、『カード』を肌身離さず持つ事が義務付けられている。

『・・・以上で私からの挨拶を終わらせていただきます。みなさん、これから頑張ってください。』

未来が挨拶を終え、退場していく。周囲からは割れんばかりの拍手が鳴り響いた。

「凄い人気だね。」

「まあ、『真の未来』だからな。」

「うむ。『六魔天』のトップ陣の中で、表に顔を出すのは未来理事を含め数は少ないからな。」

『七大法典』の・・・『六魔天』のトップは世界的に見てもV I Pだ。おそらく大統領や総理大臣並に下手をしたらそれ以上に、重要な人物だろう。よって、命を狙われるのは当たり前だ。だからこそほとんどの者は表には出てこないのだが、何人かは表に出てきている。少なくとも一組織で一人は・・・その一人が『真の未来』だ。司る法典は真実、魔法は未来を視る事。『真実を見つめる者』とも呼ばれている。

そのため、襲撃があっても予め対策を立てたり、事前に襲撃者を捕らえたりすることが出来る。なので、未来は表に出てきている。

『続きまして、生徒会長からの歓迎の言葉です。』

未来の後に美夜が続く様だ。未来の後だと言つのに堂々としている。

『みなさん、ご入学おめでとございます。』

「本当に生徒会長だったんだな。」

「ははは・・・まあ、あの姿から想像できないけどね。」

慧と緩奈は互いに呆れとも関心ともつかない声を上げる。先ほど会った時は中庭で寝ており生徒会長っぽくなかったが、今、堂々と挨拶をしている姿は確かに生徒会長の威厳の様なものを纏っている。

「ほう、二人とも、生徒会長と知り合いだったのか？」

二人の話ぶりから知り合いと思つた真樹は関心の声を上げる。

「いや、知り合いと言うか、校舎の中で迷つてしまつてな、たまたま会つて、ここまで案内してもらつたんだよ。」

なお、三人は、さっきから生徒会や風紀委員に目をつけられない様に、正面を向いたまま会話を続けている。このような場面に慣れているのだらう。

「何？真樹？会長の事何か知っているの？」

「む？ああ、神凧 美夜、二年Aクラスで属性は『無』、12歳で『魔法使い』の資格を取り、現在ランクはS。そして、神凧財閥の一人娘だ。」

「え！？もう資格をもっているの？しかもS？本当に凄いんだね。」

「へへあの、神凧財閥の・・・ね。属性は『無』か・・・」

慧と緩奈はそれぞれの反応を見せる。

まず、緩奈が驚いた点だが、『魔法使い』の資格は最低Dランクから始まり、ランク？の魔法から順に、公に使えるようになる。この資格を取るためにはそのレベルの知識、技術が無ければ取る事ができない。また、それにふさわしい人格も見られ、それが認められないといけない。様々なものを見られるため、資格をとるのは難しいのだ。それを12歳で取得し現在のランクSは大変凄い事なのだ。

ランクを上げる方法は2通りあり、依頼をこなすか、昇格試験を受ける事である。どちらにしる、難しいのであるが、学生でこれをこなすのは凄いことである。

なお、『魔法』の使用には制限があるため、独学では難しく、普通は『魔法使い』に師事するか、天城ヶ丘学園の様な場所で学ぶことで、可能となる。また、資格を持った者が認めれば、資格を持たない者も許可を出した魔法使いと同等のランクまでなら魔法を使用しても咎められない。美夜の場合どちらか不明ではあるが、凄い事に違いはない。

次に慧が驚いた点だが、神凧財閥は『魔法協会』の中枢を担う財閥の一つで、現在の頭首である『神凧^{かんなき} 神威^{かむい}』は『七大法典』の人でもある。その娘だと言う事だ。

そして、『無』属性とは、世界でも数えるほどしか確認されていない珍しい属性なのだ。

属性は基本の『火』『水』『風』『土』『光』『闇』の6つを元に、その組み合わせで更に『氷』や『雷』『炎』などに区別される。

『無』属性もその中の一つな訳だが、全ての属性のバランスがある条件へならないといけないため、大変珍しいのだ。

『・・・それでは、皆さん。これから、一緒に頑張りましょう。』

美夜は拍手と共に壇上を降りて行った。その際、美夜から「ちゃんと人の話を聞きなさい」という視線を感じた慧であったが、気付かない事にした。

「さて、それじゃあ、教室にいきますか。」

入学式も終え、新入生は退場し、各自教室に向かう所だ。クラス分けは事前に合否判定と共に通知されている。

「そうだね。それにしても皆、Fクラスだったんだね。よかったよ。」

「フム・・・そうだな。」

「ああ。」

なお、SとIとクラス分けされているが、意味があるのはSとAだけで、他は特に意味はない。SはSpecialのSだ。どこかの財閥の息子や娘、『六魔天』のトップに関係ある者、特殊な属性などを集めたクラスである。

そして、AはAceのA・・・またはアルヴィスのAでもあり、実力者集団と言ってよい。何故、SとAだけ特別なのかと言うと、Sは様々な理由から命を狙われる危険性があるものが中心のため、Aは貴重な人材で周囲と合わせるより、独自に学習した方が、効率が良いと判断された者達である。

それ以外は、普通に、様々なバランスを考えた結果なのだろう。

そうこうしている内に教室にたどり着いた慧達は、丁度窓際の席が3つ開いていたので座る事にした。

「丁度開いていて良かったね。」

「ああ、こんな特等席、何で誰も座らな・・・ああ、そういうこと・・・」

「・・・ふむ、教諭が来たようだな。」

真樹が言うので教室のドアに視線を向けると丁度開くところだった。そこから入って来たのは青い髪を肩まで伸ばし緑色の瞳をした、タイトスーツに身を包んだ女性だった。身長は160?といったところか、スレンダー・・・を通り越してツルペタな体形をしている。顔は幼く、中学生と言っても差し支えないだろう。しかし、制服を着ていない以上、生徒ではないだろう。

「全員！席へ着いてしゃべるな！HRを始める。私はこのクラスの

担任になった『アイラ・スフィール』とう。今日から一年間よろしく頼む。」

見た目、幼いが、態度はかなりでかい。しかも相応の存在感を放っている。内部生も中にいるのか、彼女の事でコソコソと話す声が聞こえてきた。

「マジかよ・・・」「アイラ先生か・・・」「厳しいんだよねえ
くアイラちゃん」

などなど、どうやらそれ相応に恐れられているらしい。

「そこ！しゃべるなど言っただろうが！次喋ったら、校庭走らせるぞ！」

「は、はい！すみません！」

「それじゃあ、話しを始めるぞ。今日の所はとりあえず自己紹介と、明日からの流れの説明をして終了だ。それじゃ、早速窓側から始めて行ってくれ。」

アイラの指示に従い、窓側の前の席の生徒から自己紹介を始めて行った。自己紹介の内容は大概、名前、属性、何処の学校から来たか、後は人によっては趣味などを話している。

「えーと、仙海 緩奈です。属性は『植物』で、出身は『櫻ノ森中
学』です。趣味はゲーディングです。よろしく願います。」

緩奈が自己紹介し、続いて、慧の番となった。

「黒澤 慧。属性は『闇』、出身は緩奈と同じ『櫻ノ森』だ。よろしく。」

慧が自己紹介を終え、真樹が続く。

「葛城 真樹だ。属性は『風』、出身は前に二人と同じだ。趣味はバイトだ。よろしく頼む。」

そして、席に着く。

こうして、何事もなく自己紹介を終え、明日の説明を受け今日は終了となった。

「それでは、各自、大人しく帰れよ！解散！」

「……お疲れ様でした！」「……」

こうして、最初は迷ったりしたものの、最後の方は何もなく、無事に初日を終えたことに安堵し、慧は帰宅の途に付いた。

その際、何かを忘れている気がしたが、思い出せないことなら大したことは無いと思い、無視して帰宅したことが後日、面倒事を招く訳だが、それは知る由もない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1769ba/>

深淵の内包者（闇の断罪者と無の還元者～世界の秘密と魔法使い～の再構

2012年1月6日01時49分発行